



Title	交差するレトリック : 精神と身体、メタファーと認知 はじめに
Author(s)	渡辺, 秀樹
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 1-1
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/61986">https://doi.org/10.18910/61986</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

渡辺秀樹、大森文子、霜鳥慶邦

はじめに

渡辺秀樹

2016年は英国史と英文学史において多くの記念の年である。古くは1016年に英国はクヌート王に征服されてデンマーク領になった。ちょうど *millennial* 千年期であり、英国では中世研究者や古北欧語研究者の記念行事があった。その500年後1516年に出たのがトマス・モアの『ユートピア』ラテン語版、この500周年である。シェイクスピアは1564年生まれ1616年没、没後400周年。言語文化研究科のメタファー研究者二人でこれを記念して、認知レトリック論(金曜2限)で『ハムレット』を精読し、同科目5限では『マクベス』と『ソネッツ』の認知詩学的論考をした。さらには『嵐が丘』『ジェインエア』などで知られるブロンテ三姉妹のうち年長シャーロットが生まれた1816年の200周年でもあり、世界中で人気の衰えない小説家、英語教科書にも採用されているロアルド・ダールの生誕100周年でもある。記念行事が目白押しだった。

そして第一次世界大戦1914-1918年の百周年期間でもある。筆者は2016年7月にロンドン大学で行われた国際英語教授連盟(IAUPE)の第8回大会で発表した。この大会のメインテーマが当然、第1次大戦とシェイクスピアであった。自身の発表は中世英語部門 *Old English* で行ったのだが、専門の古英詩 *Beowulf* について、会場のロンドン大学と第1次大戦と *Beowulf* に関わる話しをしたのである。10数年前に東京の古書店より古英詩 *Beowulf* の Wyatt 校訂版(1894年)を入手した時、表紙の裏には I. Gollancz というサインと、その下に別人の震える筆跡で“sent to me in Flanders in 1914 by Professor Gollancz, H. S. B.”という書き込みがあり、本の中にその詩の部分現代英語訳手書き原稿が挟まっていた。これをよく読むと素人訳ではとうていなく、中世英語頭韻詩を専門に研究している人間の訳文であることがわかった。書き込みの名前とイニシャルを手がかりに Gollancz 教授の経歴や講義の内容などを調べてわかったのは、Sir Israel Gollancz 教授は第1次大戦前にロンドン大学の夜間コースで中世英文学の講義を持っており、主な受講生は昼間に教師をしている人々で、原語では読めないために翻訳を用いていたこと、その講義の受講生の中に、当時ロンドンの小学校の校長をしていた Henry Stanley Bennett 氏がいた。彼は尉官として出征して毒ガス攻撃で負傷、英国帰還後にケンブリッジ大学へ進学し、後に同大学中世英国史教授となった男性である。

筆者は Gollancz 教授が日本人の大谷教授へ送った手紙の筆跡と挟まっていた現代英語訳断片の筆跡の書き癖を照合し、複数の共通点を見出した。訳文は中世頭韻詩に見られる様々な頭韻パターンを駆使して訳されており、*Beowulf* に見える怪物との3度の闘争の内の第2、グレンデルの母親との水中洞窟での戦いの部分(1159b-1622行)をカバーしている。これらから私が推測(ほぼ断定)する結論はこうである。Sir Israel Gollancz 教授は、夜間コースで受講していた Bennett 氏が出征したことを知り、激戦地フランダースにいる彼を励ます(戦地慰問)ために、教授所有の *Beowulf* 校訂本を送った。挟まっていた現代英語訳は、夜間コースでの *Beowulf* の講義に使用したものか、もしくは訳文断片部分が、主人公 *Beowulf* が劣勢になりながら神の加護で勝ちを収め、水中から地上に生還するという内容であることから、戦場から生還せよというメッセージを込めて挟み込んだものである。

学会出張期間には英国図書館に通って資料を閲覧していたが、館内書店に第1次大戦関係書のコーナーがあり、発表のための研究調査を通じて大戦に従軍した文学者にも興味がわいていた。買い求めた小さなオーウェン詩集をホテルで読みふけたが、特に、“*Dulce et Decorum est*”という詩、この毒ガス攻撃の生々しい描写に H. S. B. の姿が重なり、その符合に感動した。言語文化研究科の大森文子准教授は英詩メタファー分析の専門家で、霜鳥慶邦准教授はオーウェン協会の専門家である。で、このセッションを企画し、オーウェンの命日に行うことになったのである。